

乙 貞

第160号 通巻28巻 第3号

平成20(2008)年9月1日 発行

守山市立埋蔵文化財センター

Tel・Fax 077-585-4397

〒 524-0212

守山市服部町2250番地

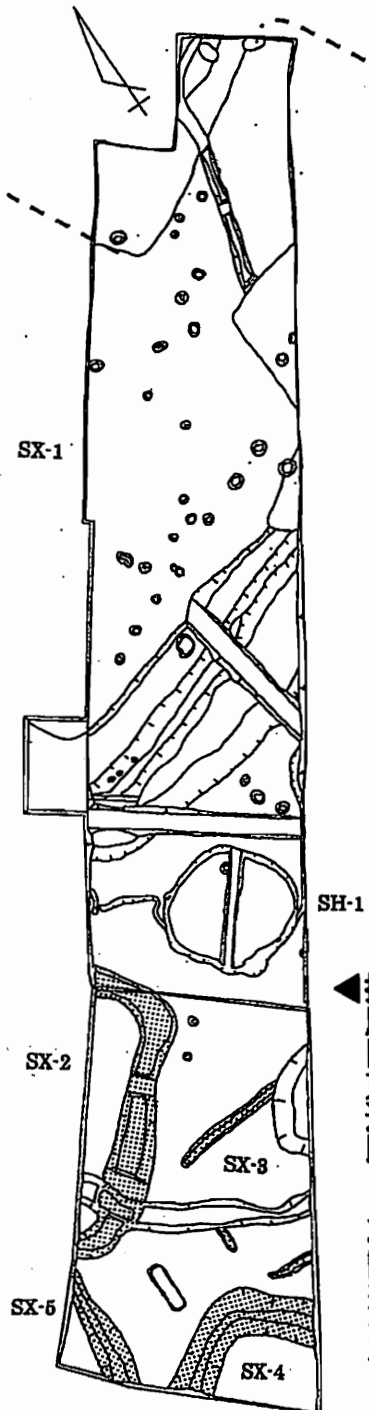
発掘調査だより

1. 播磨田東遺跡第16次調査

共同住宅の建築に先立ち、播磨田町字宮部の水田地において7月初旬から約1ヶ月をかけて発掘調査を実施しました。播磨田東遺跡は縄文時代から奈良時代にかけての集落遺跡として周知されていますが、今回の調査地周辺では古墳時代前期の前方後方型周溝墓ぜんぽうこうほうがたしゅうこうぼや古墳時代後期の円墳えんぶんなどが検出されており、古墳時代の墓域ぼいきの広がり判明するものと期待されました。

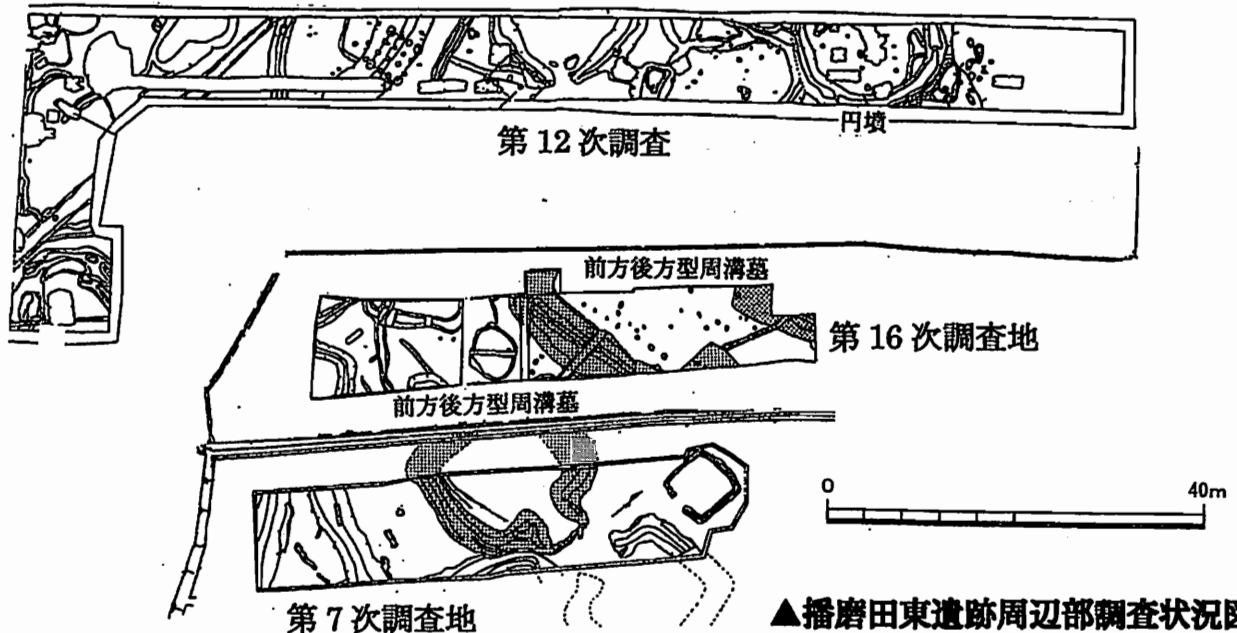
調査の結果、新たに前方後方型周溝墓(SX-1)が発見されました。周溝から出土した土器から古墳時代初頭に築造された墓と推測されます。周溝は幅約5m、深さ1.2mを測る逆台形の断面形を呈する大規模なものです。全長26m、後方部長16.5m、前方部長9.5mの規模と推定され、市内では最大規模の前方後方型周溝墓とみられます。前方部前面の溝は途切れており、周溝が全周しないタイプと考えられます。平成9年には隣接地で前方後方型周溝墓が発見されていますが、今回の調査で2つの前方後方型周溝墓が軸を同じくして、並んで造られていたことがわかりました。

このほか、4基の方形周溝墓ほうけいしゅうこうぼ(SX-2~5)が検出されました。いずれも、一辺5~9mの規模で、前方後方型周溝墓のまわりに小型の墓がつくられていたことがわかりました。周溝墓の上には古墳時代後期の掘立柱建物の柱穴ほったてばしらたてものがみられ、古墳時代後期には墳丘ふんきゅうが削平まくへいされていたことがわかります。このことから、前方後方型周溝墓の墳丘がもとより低いものであったと推測されます。また、弥生時代後期のたてあなじゅうきよ竪穴住居(SH-1)が1棟検出されており、墓



域がつくられる前は居住地として利用されていたことがわかりました。

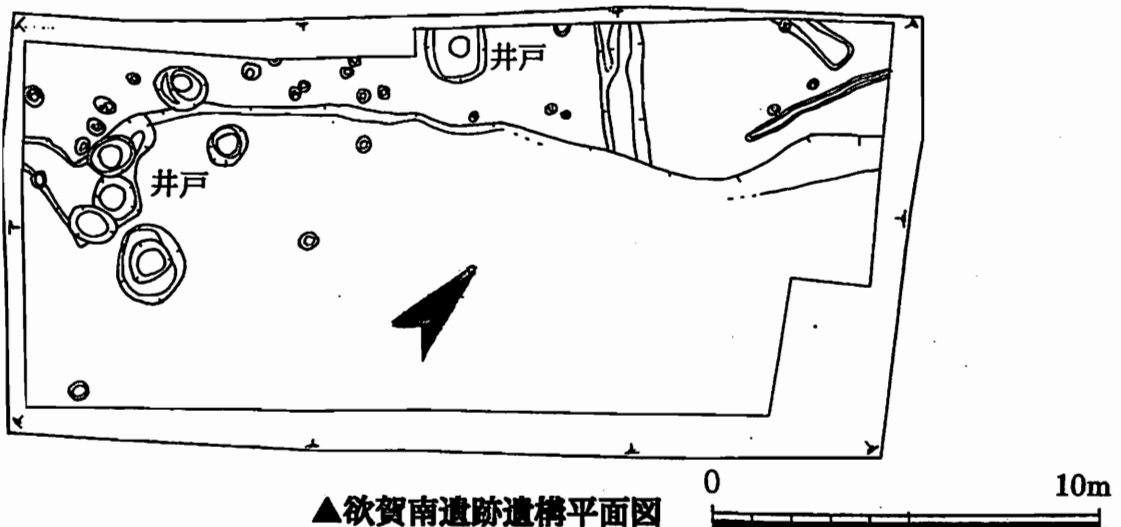
前方後方型周溝墓は湖南地域に集中する形式の墳墓^{ふんぼ}です。守山市内では9例目で、野洲川流域では19例目となります。前方後方型周溝墓は単独で発見されることが多いのですが、今回のように2基が並存する例は珍しいといえます。(伴野)



▲播磨田東遺跡周辺部調査状況図

2. 欲賀南遺跡の調査

7月末から共同住宅建築に伴い発掘調査を実施しました。調査地は欲賀土地区画整理^{ほしか}区内で、隣地の調査成果により平安時代後期～鎌倉時代の集落の一部が発見されることが予想されました。調査の結果、平安時代後期～鎌倉時代にかけての井戸や柱穴が見つかりました。ただ、東側は低地となっていたようで、建物跡は確認できませんでした。井戸は集中して7基見つかりました。湧水の良い場所を選んで、何度か井戸をつくり直したことがわかります。遺物では土器のほか、軒平瓦^{のきひらがわら}1点と墨書土器^{ぼくしょどき}1点が出土しました。瓦は唐草文^{からくさもん}が施されたもので、平安時代後期頃のものではないかと考えられます。当時、周辺に寺院など瓦葺^{かわらぶ}きの建物があった可能性が考えられます。(小島)



▲欲賀南遺跡遺構平面図



▲調査位置図

3. 吉身北遺跡・赤目遺跡の調査

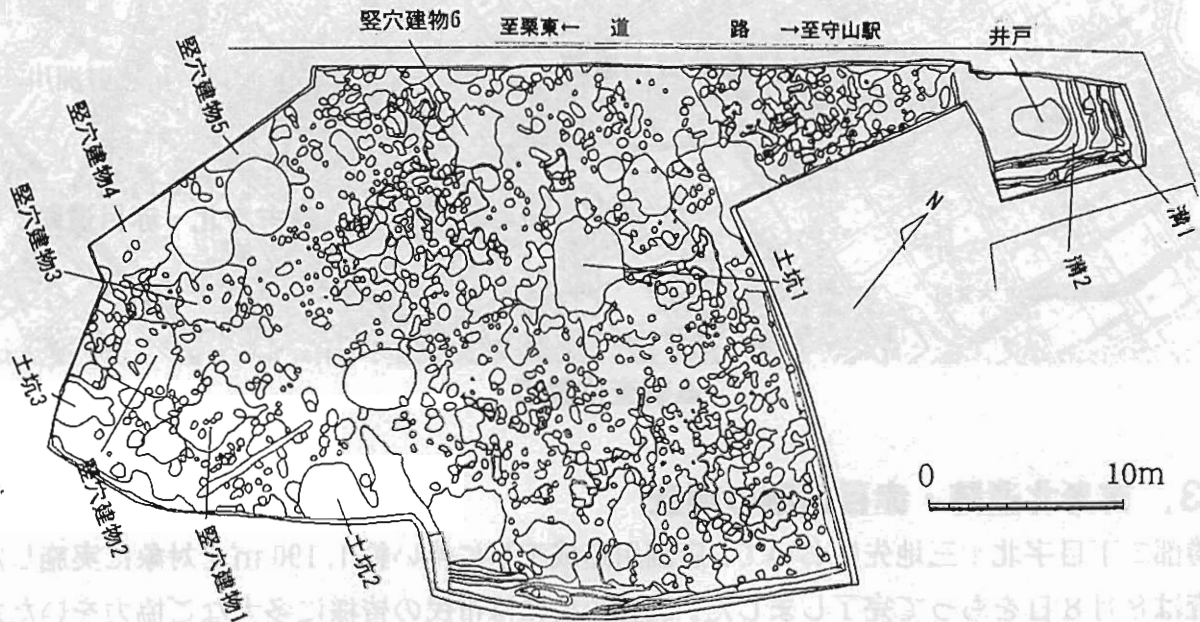
勝部二丁目字北十三地先において、店舗用造成工事に伴い約 1,190 m²を対象に実施した調査は 8 月 8 日をもって完了しました。調査の折には市民の皆様にご多大なご協力をいただきありがとうございました。

調査では、大きく分けて古墳時代後期と室町時代後半の二時期の遺構が確認できました。このうち、古墳時代後期の遺構は^{たてあな}竪穴建物 6 棟や土坑、溝跡などを検出しました。竪穴建物 2・5・6 にはカマドが設置されており、^{たてあな}竪穴住居の可能性ががあります。また、竪穴建物 1 からは玉の原材料となる^{かっせき}滑石のチップが数点見つっています。吉身北遺跡では、大量の玉作り関連遺物が出土したことから^{こうぼう}工房跡に想定される^{たてあな}竪穴遺構（16 次調査）をはじめ、玉作りに関わる遺物が出土する遺構がこれまでの調査で確認されています。今回見つかった竪穴建物も工房や^{たてあな}住居など、玉作りに関連する可能性があるかもしれません。

室町時代の遺構は 10 基の大型の土坑に井戸、溝跡などを検出しました。大型の土坑からは^{しがらき}信楽焼の甕や^{かめ}播鉢をはじめ、^{せいじ}青磁・^{はくじ}白磁の碗など多くの遺物が出土しています。土坑 2 は底が非常に硬くなっていることから、^{みずため}つき固めて水溜りに使用していたことが推定されます。北東部で検出した溝 1・2 は直線からほぼ直角に屈曲しており、人工的な水路もしくは集落の区画溝であったと考えられます。この時代の遺物はバラエティに富んでおり、土で作られた犬の人形や石の^{すずり}硯、^{いしうす}石臼や^{といし}砥石など、当時の人々の生活の様子を示すものが多く出土しました。

今回の調査結果で確認できたことは大きく二点あります。まず一点目は、古墳時代の吉身北遺跡では、主に西側（守山駅側）に建物跡をはじめとする遺構が集中する傾向がありましたが、今回の調査地点である東側（栗東側）にも建物跡が多数見られ、集落が広く展開していたことがわかりました。二点目には、これまで周辺で見られなかった室町時代の

遺構が隣接地点の調査（14次調査）と同様に多数検出でき、一帯に中世の集落が展開していたことを改めて確認することができました。ただし、調査区全体にかなりの遺構が密集しており、さらにこれらが二時期以上に区分されることから、今後の整理調査の次第によっては新しい発見が出てくる可能性もあるでしょう。（木下）



▲吉身北・赤目遺跡遺構平面図

☆ 親子考古学教室の開催 ☆

埋蔵文化財センターでは、夏休み期間中に親子考古学教室を開催しました。親子10組、25名が3日間にわたるメニューに挑戦し、立派な考古学者ぶりを発揮していました。

初回（8月2日）は古墳時代の前方後方型周溝墓が見つかった播磨田東遺跡での「発掘体験」。指導する職員が驚くような土器を掘り出した参加者もいました。二回目（8月10日）は古代に玉の材料になった滑石を使った「勾玉づくり」です。原石を加工し、見事なオリジナル勾玉をつくりあげました。三回目（8月24日）は「火おこしと古代食体験」。あいにくの雨模様の天候にもかかわらず、皆さん熱心に火おこしに挑戦していました。おこした火種で手づくりカマドに点火。古代米を炊き上げ、用意したシジミ汁と一緒に試食を行いました。おかわり続出で、見る間に完食となりました。

いずれの回も熱心な参加者皆さんの姿が印象的でした。この中から、未来の考古学者が現れる日も近いかもしれませんね。

※詳細は市のホームページでご覧いただけます。なお、掲載期間は9月末までです。



▲発掘体験風景